

ふるさとの 其の37 誇り



大和川に設置された巨石積堰堤
明治・大正時代(山本政一氏蔵)④
現在⑤



現在も砂防工事の石積み護岸が見られる市之瀬川

現代を支える 近代の砂防技術

明治時代に入ると、山梨県では明治15年、29年、40年、43年と立て続けに大きな洪水が起こりました。その中で、日本の治水・砂防の歴史において画期となる事業が現在の南アルプス市域内で進められたのです。

明治時代、新政府はオランダ人技術者を招き淀川や木曾川をはじめとして全国で治水工事を施工しました。山梨県は明治13年に職員2名を右記の地へ派遣して現地視察を行わせ、翌年、全国で初めてとなる県単独で行う砂防工事を当市の市之瀬川で実施します。それは、大きな石を積んで堰堤を設置し、石積みによって護岸工事を行うものでした。この取り組みには、水を治めることに対する

山梨県人の意識の高さをうかがうことができます。

その後、明治16年にオランダ人工師ムルドルが御勅使川や市之瀬川などを視察し、砂防工事の必要性を報告します。これを受けて、御勅使川をはじめとする釜無川の支流に石積みの砂防堰堤が多数築かれました。しかし石を積んだだけの堰堤では強度に限界があり、現在ではほとんどの堰堤が流失あるいは埋没しています。その一方で、曲輪田地区を流れる大和川には、現在でも明治時代の姿をとどめる巨石積堰堤が残されており、これは全国的にみても砂防の歴史上たいへん貴重な遺産と位置づけられるでしょう。

さらに、明治43年に起きた全国的な大

水害の経験から、政府は第一次治水計画を立ち上げ、この計画にそって御勅使川流域でも内務省の直轄砂防事業が実施されました。これによって築かれた芦安堰堤は日本で初めてコンクリートを使用した本格的な砂防堰堤で、その後、源堰や藤尾堰堤などコンクリート堰堤が次々と設置されていきます。

このように近代以降、当時の先端技術を駆使した堰堤群が整備されることにより、御勅使川の治水は大きな転換点を迎えることになります。これ以後、下流域での砂防工事も進み、源堰堤より下流での大規模水害はほとんど見られなくなりました。

近世から続く治水技術と近代の砂防技術によって、御勅使川扇状地や甲府盆地に生きる私たちの暮らしは今も支えられています。

※1 砂防 山の斜面や崖が崩れるのを防止し、土砂災害を未然に防ぐこと。
※2 画期 時代の区切り
※3 砂防堰堤 土砂災害を防止する目的で設置されたダム。